タイトル

ゴージャスお宝鑑定家～「う～ん、ゴージャス！」41

登場人物

剛田

剛田質店の店主。ゴージャスな品物しか鑑定しない。言動や所作が優雅で品があるが、その優雅さが行き過ぎていて「クセが強い」と思われる。モットーは『ゴージャスたるもの優雅たれ』。口癖は「ゴージャス！」

白金

剛田質店の見習い鑑定士。剛田とは対照的に価値観が一般人寄りで、剛田のテンションや価値観に振り回される。神経質で心配性な性格。

お客様

今回のお客様。アメジスト製の蠅叩きを持参する謎めいた人物。品物の真価を求めて剛田質店を訪れる。

その他モブキャラ

通行人や店内の客、ナレーション。

オープニング

（画面いっぱいに煌びやかな装飾が施された看板が映る。「剛田質店」という文字が金色に輝いている。バックには優雅なクラシック音楽が流れる）

ナレーション（優雅な声）

「ここはとある街の片隅に佇む剛田質店――ゴージャスな品物だけが集まる特別な場所でございます。本日も新たなゴ

ージャスが、ここに舞い降りるのでしょうか？」

（店内の映像に切り替わる。壁には豪華な絵画やシャンデリアが並び、まるで美術館のような内装。剛田がカウンターでポーズを決めている。）

剛田（朗々と）

「はぁ～い！皆さま、今日も素晴らしきゴージャスワールドへようこそ！剛田質店、開店でございます！さぁ、どんなゴージャスが舞い込んでくるのか……楽しみで仕方ありませんなぁ！」

白金（ため息交じりに）

「剛田さん、朝からそのテンションだとお客様が引きますよ。普通にしててください。」

剛田（優雅に振り向きながら）

「白金くん、普通ではゴージャスを見逃

してしまいますよ。ゴージャスたるもの、常に優雅たれ！」

白金（呆れながら）

「はいはい、またそれですね……。」

（チャイムの音が響き、ドアが開く）

お客様

「すみませーん、こちらで鑑定をお願いできますか？」

剛田（キラリと目を輝かせ）

「おやおや！早速、ゴージャスな香りがするぞ……！どうぞお入りください！」

第一幕：謎のお宝、現る

（お客様がカウンターに進み出て、包みを大事そうに差し出す）

お客様

「こちらの品物を見ていただきたいんです。」

（包みを開けると、中にはアメジストで作られた蠅叩きが現れる）

白金（驚いて）

「蠅叩き！？これ、アメジストでできてるんですか？」

剛田（目を輝かせ）

「うおおおお！これはなんという……なんというゴージャス！アメジストの輝き、蠅叩きという実用性、そしてこの美しい曲線美！完璧じゃないですか！」

白金（困惑しながら）

「いやいやいや、蠅叩きですよ！？それをゴージャスって言いますか普通？」

剛田（お客様に向き直り）

「お客様、この品物について詳しく教えていただけますか？どのような経緯でこのゴージャスが誕生したのか、ぜひ！」

お客様（少し恥ずかしそうに）

「実はこれ、祖父が昔作らせた特注品なんです。蠅叩きが趣味でして……でも、ただの蠅叩きじゃつまらないと言って、このアメジスト製を作らせたとか。」

白金（呆れた顔で）

「趣味でアメジスト……すごい発想ですね。」

剛田（興奮気味に）

「素晴らしい！このこだわりこそがゴージャス魂です！お客様、この品を鑑定させていただいても？」

お客様

「はい、よろしくお願いします！」

（剛田が白手袋をはめ、蠅叩きを持ち上げる。その所作はまるで王冠を扱うかのように優雅。）

剛田（真剣な顔で）

「では、ゴージャス判定開始です！」

第二幕：鑑定の舞台裏

（剛田が蠅叩きを細かく鑑定していくシーン。白金がその様子を見守りながら、時折突っ込みを入れる）

剛田（ルーペで覗き込みながら）

「この彫刻……素晴らしい！職人の魂を感じます！」

白金

「いや、魂込めるところ間違ってませんか？」

剛田

「白金くん、魂に間違いなどないのですよ。ただ、ゴージャスか否か、それだけです！」

（剛田がハンマーで軽く蠅叩きを叩き、音を聞く）

剛田（恍惚とした表情で）

「この音……澄んだ音色、まるで天上の鐘のごとし！」

白金

「いや、蠅叩きに音色なんて求めませんって！」

剛田（熱弁し始める）

「白金くん、アメジストには“真実の愛”や“冷静さ”という石言葉があるのだよ。これを手にすることで、心が澄み渡るのだ。だからこそ、たとえ蠅叩きであっても、この美しさは持つ者を高みに導く！」

白金（呆れ顔）

「それ、ただの自己満足ですよね……。」

（剛田が蠅叩きを構えて店内を歩き回る。すると、一匹の蠅がふわりと飛び込んでくる）

剛田（目を輝かせ）

「おお、蠅がいるではないか！試してみる絶好の機会！」

（蠅を狙って蠅叩きを振りかざすが、蠅はくるくると逃げ回る）

白金（心配そうに）

「ちょっと剛田さん！壊れたらどうするんですか！」

剛田（真剣な顔で）

「美しいものに触れることで、蠅すら悟りを得るのだよ！」

（その瞬間、蠅が蠅叩きの美しさに魅了されるように自らぶつかってくる。パタン、と落ちる蠅）

剛田（歓喜）

「見たまえ！蠅すら自らぶつかってみたくなる美しさ！すばらしい！」

白金（頭を抱えて）

「いやいや、そんなことあるわけ……本当にぶつかるんですね……。」

（剛田と白金の会話が続き、さらに蠅叩きの美しさについて語る。白金は次第に剛田の情熱に巻き込まれるが、最後には現実に戻るような突っ込みを入れる。）

第三幕：買取価格の発表

（鑑定が終わり、ついに買取金額を発表する）

剛田

「このゴージャスたる蠅叩き、買取価格は……50万円とさせていただきます！」

お客様（驚きながら）

「そんなに！？ありがとうございます！」

白金（呆然と）

「蠅叩きに50万……世の中どうなってるんだ。」

エピローグ

（夜、剛田が店内でアメジストの蠅叩きを眺めている。蠅叩きは特別な展示台に飾られている。）

剛田（満足そうに）

「うーん、ゴージャス！これで店内もさらに優雅になりましたなぁ……。」

（剛田が静かに見守る中、ふと蠅が店内に入り込む。）

剛田（そっと蠅叩きを取り出して構える）

「おやおや、君もこのゴージャスに引き寄せられてきたのかね……。さあ、どうだ、この輝きを！」

（蠅が再び蠅叩きに自ら突進してくる。次々と蠅が落ちる様子が映る。）

（翌朝。白金が出勤してきて、店内を見渡すと、床に大量の蠅の死体が散らばっている。）

白金（驚愕）

「うわあ！なんですかこれ！？蠅の死体が山盛りじゃないですか！」

剛田（平然と）

「美しさに惹かれ、蠅が勝手に……ゴージャスな浄化現象ですな！」

白金（キレ気味に）

「浄化現象じゃないです！片付けてください！」

剛田（優雅に）

「わかりましたよ、白金くん。しかし、これがゴージャスの力だと知るべきです。」

（白金がため息をつきながら掃除を始める。一方、剛田は再び展示台に飾られた蠅叩きを眺め、微笑む。）

剛田（独り言）

「今日もまた、ゴージャスが新たな歴史を刻む……。」

（店内に優雅なクラシック音楽が流れ、画面がフェードアウトする。）

ナレーション（優雅な声）

「これにて本日のゴージャスも一件落

着。次なるゴージャスは、あなたのもとに――。」

（エンドクレジット。背景には蠅叩きが輝く姿が映されている。）

オープニング（約５分）

- 剛田質店の紹介と剛田・白金の日常。
- お客様の来訪とアメジスト製の蠅叩きの登場。

第一幕：謎のお宝、現る（約15分）

- お客様とのやり取り。
- アメジスト製蠅叩きの背景や製作秘話が語られる。
- 剛田の初期リアクションと白金の突っ込み。

第二幕：鑑定の舞台裏（約25〜30分）

- 剛田が蠅叩きを詳細に鑑定。
- 石言葉や美しさについての熱弁。
- 店内に侵入した蠅を試しに叩こうとするシーン（コメディ要素強め）。
- 蠅が自らぶつかってくる奇抜な展開。

第三幕：買取価格の発表（約15分）

- 剛田が価格を発表するまでの溜めや白金のリアクション。
- 高額査定に驚くお客様と、呆れる白金。
- 剛田がゴージャスの意義を再度強調。

エピローグ（約10分）

- 夜の剛田の行動（蠅叩きを店内に設置）。
- 翌朝、大量の蠅の死体を見て白金が一喝。

• 剛田と白金の掛け合いで締め。